

## 創作ダンス作品発表がもたらす自己肯定度の変容 全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)受賞者の上演

高橋和子 (静岡産業大学)

### 1. はじめに

ボディ・ワークや創作ダンスの即興表現や作品発表が、自己肯定感やレジリエンス(立ち直る力)の向上に影響を与える事がわかってきた(清水1998, 高橋2016, 佐藤2018)。また、高校生や大学生の創作ダンスコンクールの最高峰である全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)(以下、AJDF)を対象にしたレジリエンス研究においても、作品上演により受賞者を運動好きやダンス好きにさせ、精神的健康や回復力をあげる事から、レジリエンスを高める事が明らかにされている(高橋2018)。そこで、本研究ではレジリエンスに影響を及ぼす自己肯定感に着目し、創作ダンスの作品発表により自己肯定感がどのように変容するかを探る事を目的とする。

### 2. 方法

第31回AJDFの受賞者247名(高校6校107名・大学7校140名)に対し、2018年8月の特別公演(受賞作品2回上演)前後に質問紙調査(自己肯定度尺度 self esteem inventory:以下、SEI)を実施し、その場で回収する方法を取った。

#### 2-1 調査項目

次の①②は上演前の1回、③のSEIは上演前後に2回調査した。

- ①ダンス経験(1年未満, 1-5年, 5-10年, それ以上)
- ②「運動好き」「ダンス好き」について5段階評定
- ③SEIには、カルフォルニア大学のCoopersmithが開発した25項目を使用した。「はい」「いいえ」の2択である。この尺度は4つの因子「一般的自己:12項目」「仲間関係での自己:4項目」「家庭場面での自己:6項目」「学校場面での自己:3項目」からなる。また、設問は肯定的回答項目8個と否定的回答項目17個により構成されているため、前後の変化値で比較した。

#### 2-2 分析方法

統計ソフト IBM SPSS Static Version22.0 で処理し、対応あるサンプルの検定を行い、結果の有意水準はいずれも5%未満とした。有意差のある場合、0.1%水準は\*\*\* $p < .001$ 、1%水準は\*\* $p < .01$ 、5%水準は\* $p < .05$ と表記した。本研究は静岡産業大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 受賞者のダンス経験と運動・ダンス好嫌度

受賞者のダンス経験が5年以上は、高校生では58.8%、大学生では69.3%であり、受賞校においてはダンス経験者が多い傾向がみられた。

運動やダンスの好きか嫌いか(好嫌度)を5段階評定で聞いたところ、「好き・やや好き」は、「運動」では高校生は86.9%、大学生は89.3%に対し、「ダンス」では高校生は99.1%、大学生は97.2%であり、運動もダンスも好きな傾向であった。特にダンス好きな割合が高いと言える。

経験	1年未満	1-5年	5-10年	それ以上
高校生	9.3%	31.8%	36.4%	22.4%
大学生	2.9%	27.1%	26.4%	42.9%

運動好嫌	5(好き)	4	3	2	1(嫌い)
高校生	73.8%	13.1%	7.5%	3.7%	1.9%
大学生	65.0%	24.3%	5.7%	5.0%	0%

ダンス好嫌	5(好き)	4	3	2	1(嫌い)
高校生	96.3%	2.8%	0.9%	0%	0%
大学生	87.9%	9.3%	2.1%	7.0%	0%

#### 3-2 上演前後の自己肯定度(SEI)の変化

SEIの25項目のうち、肯定的回答を1点、否定的回答を0点として、上演前後の平均点と変化値と有意差をみた。1回の上演時間は高校生4分30秒、大学生は6分の短時間にも関わらず、2回の上演後の自己肯定度は1点上昇し、有意な肯定的変化がみられた。

SEI	前	後	変化値	有意水準
高校生	13.57点	14.39点	0.82点	<.001
大学生	13.76点	14.90点	1.14点	<.001
全体	13.68点	14.68点	1.00点	<.001

### 3-2-1 肯定的変化があったSEIの項目

上演前後の変化値（高校生と大学生全員の平均値）に肯定的に有意差が認められた項目は、次の14項目である。その中の「1～5」までは肯定的回答項目のため上演後の数値は減少し、「10～25」までの否定的回答項目のため上昇している。「一般的自己」では、「悩まずに決心できる」「言いたい事を普通言ってしまう」「物事をくよくよと悩まない」「自身の変えたい事が沢山ある」「時々自分が嫌になる事がある」「色々な事柄が生活を複雑にする」「自分自身をあまり信用していない」「他の人に比べ人に好かれていない」。「仲間関係での自己」では、「付き合ってみると面白い人間である」「同世代に評判がよい方である」。「家庭場面での自己」では、「家ですぐ腹を立てる」「家を出たいと思う事が度々ある」。「学校場面での自己」では、「学校でどうしてよいか分からなくなる」「しばしば学校でやる気をなくす」項目であった。

次に4因子の中で、肯定的変化があった項目数の割合を比較すると、数値が高い順に「仲間関係75%」「学校場面66.7%」「一般的自己58.3%」「家庭場面33.3%」であった。このことより、作品上演は、「仲間関係」や「学校場面」での自己肯定度を上昇させる事が明らかになった。

SEI 項目	前	後	有意水準	因子
1 悩まずに決心	1.648	1.543***		一般的
2 言いたい事を言う	1.482	1.429**		一般的
3 物事を悩まない	1.599	1.538**		一般的
4 面白い人間	1.429	1.363***		仲間
5 同世代に評判よい	1.702	1.661*		仲間
10 変えたい事がある	1.138	1.182*		一般的
13 嫌になる事がある	1.174	1.263***		一般的
14 事柄が生活を複雑	1.417	1.478**		一般的
15 自分を信用しない	1.555	1.632***		一般的
16 人に好かれない	1.622	1.679***		一般的
19 家で腹を立てる	1.563	1.636***		家庭
21 家を出たい	1.668	1.696*		家庭
24 どうしてよいか	1.591	1.619*		学校
25 学校でやる気喪失	1.526	1.579**		学校

因子名	項目数	有意差ある項目(%)
1. 一般的自己	12	7 (58.3%)
2. 仲間関係での自己	4	3 (75.0%)
3. 家庭場面での自己	6	2 (33.3%)
4. 学校場面での自己	3	2 (66.7%)

## 4. 結論

創作ダンスの作品発表の中でも、全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)における受賞作品上演は、受賞者の高校生や大学生にとって、自己肯定度にどのような変容をもたらすかを質問紙調査で行った結果、次の事が明らかになった。

1. 受賞校の高校生や大学生では、ダンス経験者が多い傾向がみられた。
2. 受賞者の「運動好き」は90%近くおり、「ダンス好き」は100%近くいた。
3. 受賞作品上演は自己肯定度をあげる事に繋がった。自己肯定度尺度を構成する4因子の中でも、特に「仲間関係での自己」「学校場面での自己」の項目において、自己の変容傾向が見られた。

以上のことから、ダンス上演はレジリエンスの一つである自己肯定感をあげる事が推察された。

### 引用・参考文献

- 1) Coopersmith, S. Self-esteem and need achievement as determination of selective recall and repetition. J. Abnormal. Soc. 60, 3, 310-317. 1960.
- 2) 佐藤菜美・若井. 新潟におけるダンスの未来を構想する. 女子体育 Vol. 60-8/9. 104-105. 2018
- 3) 清水知恵. コンタクト・ワーク経験を通して「自尊感情」と「ボディ・イメージ」の変化とその関係性. 舞踊教育学研究. 創刊号. 13-30. 1998
- 4) 高橋和子・山本光. レジリエンスを高めるダンスの有効性に関する研究. JAPEW 学術研究. Vol. 32. 1-16. 2016
- 5) 高橋和子. 創作ダンスの発表がレジリエンスに与える影響. 静岡産業大学. スポーツと人間. Vol. 3-1. 85-96. 2018